

[ケース発表]

修学支援に難渋し退学後、
就労移行支援事業所との連携を経て
バイト先へ正社員として就職し
自分らしく働いている成功例

岐阜保健大学短期大学部
リハビリテーション学科
理学療法学専攻
稲葉 政徳

背景①

多様な学生
(凸凹・精神)

- 総合型入試による入学者率大半
- 入学後「未ふるい」面が明確に

科目履修
(臨床・専門)

- 専門知識に消化不良もやり過ぎす
- 学年末に問題明るみ⇒進路変更

臨床実習
(修業年限の1/6)

- コミュニケーション面の問題顕著
- 課題遂行で行き詰る⇒提出せず

背景②と目的

- 今回は、**学業不振**から本学を**退学後**にバイト先にて正社員として採用された未診断20代男性Aさんを**成功例**として紹介する。
- 大学入学時から**アルバイト経験**があったこと、**2年**時に就労移行支援事業(以下**B事業所**)内で開催されていた**キャリア支援プログラム**(以下**キャリプロ**)に参加していた経験が退学後に**正社員**としての就職へと円滑につながった。
- 本対象者のケースを通し、大学と就労移行支援事業所との連携のヒントにすることを実践発表の目的とした。

方法 調査の流れ

- 在学時の対象者へのアンケート (**B**事業所)、学内面談記録、ゼミでの **SNS** 上での記録、学内実習での課題提出状況のほか、退学後には **A**さん本人への(3月～8月まで)月1回のインタビューなどをもとに考察した。
- 倫理的配慮について、まずは本調査の趣旨を **A**さん本人へ口頭にて十分に説明し同意を得たうえで、発表の際に個人が特定されないことを伝えた。さらに回答の可否により個人の不利益が生じることはないこと、調査の途中で辞退できることを伝えた。

方法 調査対象者と概要

指定校にて入学。1年前期より修学面で困難さ目立ち、複数科目再試験受験していた。

コミュ面、PC操作で困難さ認め、キャリアプロ受講を勧めるも「必要ない」と断られた。

2年へ仮進級。専門科目増え、学習面の困難さ顕著に。バイト先で本人を見かけ生き生きしていた。

2週目半ばで提出物滞り、次第に連絡が取れなくなる。その後再試験結果も大半が不合格

2年後期で二桁科目再試験の中、年度末に学内評価実習(4週間)にてフォロー実施

2年前期より当方のゼミ生に。キャリアプロ受講を開始。コミュニケーションなどを練習する。

3年進級に必要な課題山積中、しばらく登校し、当方研究室に課題作成や勉強をしていた。

本人の気力の無さから担任に伝え急遽三者面談を実施。その後退学した。C事業所につなげた。

その後バイト先へ正社員として採用され、現在は困難さを自覚しながらも自分らしく働いている。

対象者1年次アンケート結果

あまりできない	できない
<p>【基礎的日常生活】 日常生活のリズム、健康管理、時間の遵守、体力、余暇の過ごし方(5/14問)</p> <p>【自己管理】 向上心、忍耐力、集中力、感覚過敏、こだわり、変化への対応、衝動性(7/13問)</p> <p>【コミュニケーション】 話の内容の理解、適切な会話(2/14問)</p> <p>【自己理解】 趣味・特技、性格・特徴、柔軟な考え方、客観性(4/10問)</p> <p>【ビジネススキル】 主体性、指示理解、判断力、協調性(4/15問)</p>	<p>【基礎的日常生活】 電話対応、金銭管理(2/14問)</p> <p>【自己管理】 ストレス対処、積極性、記憶力、先の見通し(4/13問)</p> <p>【コミュニケーション】 話を聴く、気配り・気づき、会話への参加、アサーション、相手に伝わる話し方(5/14問)</p> <p>【自己理解】 強みの理解、課題の理解、自己開示、自己肯定感(4/10問)</p> <p>【ビジネススキル】 マルチタスク、パソコンスキル、報告・連絡・相談、読解力、判断力、職場への順応性(6/15問)</p>

(インタビューより)キャリアプロ講座への参加

- キャリプロについて、オリエンテーションの際に全新生へアナウンス済み。当時本人は、「話を聞きたいとは思ったが受けたいとまでは思わなかった」と述べていた。その後本人がB事業所でのキャリア支援プログラム受講に至ったのは、1年時の情報処理授業でつまずきだった。キャリアプロでは土曜日を利用して2年時に全3回受講し、コミュニケーションスキル、ビジネスマナー、パソコンスキルなどを学んだ。本人は当時の振り返りから、当初は「勉強に直接関係があるのか」と疑問に感じたようである。しかしプログラムの内容は楽しく、パソコンのレクチャーもわかりやすかったので「受けてよかった」と感想を述べていた。

(インタビューより)学内実習での試行錯誤

- コロナ禍により、本学も全学年が学内実習となった。ゼミ単位の指導は遠隔ツールを用いた指導が必然的に主となる。本人の学習の困難さから事前に“**手本**”となる資料を筆者が参考になるようにとかみ砕いた内容で作成し、**SNS**にて提示することを意識した²⁾。その後、遠隔ツールによるテレビ電話機能を用いて指導を進めた。振り返りから本人は「**わかりやすかった**」と述べていたが、課題の多さとともに、とくに「統合と解釈」の難解さが引き金となり、回避行動が顕著となった。

(インタビューより)三者面談後のC事業所面談へ

- 三者面談後、Aさんはスッキリとした表情をしていた。しかし、退学後の進路は一切決まっていなかった。
- B事業所でのキャリアプロ受講の経験があったこと、今後就活での困難さも予測されることを懸念し、本人の住所地に近いC事業所を紹介し、帰宅途中に出向いてもらった。30分ほどの面談であったが、本人の振り返りから「話を聞いてもらってスッキリした」こと、その後の就活に希望が持てたと述べていた。
- なお、C事業所面談担当者より発達障害の傾向や回避行動が見受けられたと報告を受けている。その後相談には来ていない。

(インタビュー)正社員として採用から現在

- Aさんは、バイト先で以前から正社員を募集していることを知っていた。退学を機に、採用試験を受けることができるかを自らバイト先に尋ねた。その後、無事に正社員として採用された。
- 業務では苦手なものもあるが、「**自分らしく働けている**」とAさんは話していた。
- 接客ではトラブルはないが、同僚とのコミュニケーションがうまく取れない、会話に入れないこともあり、昼休みなどは孤立しやすいようである。困ったことがあれば、近隣にあるC事業所の担当者へ相談するように伝えた。

振り返り

- ▶学内実習ではオンライン指導が主流となりつつある中、凸凹がある本人に対していかに視覚的に表し、納得し、理解できるものを提示できるかを今回は挑戦した。
- ▶本人にとっては「**退学**」という選択を最後までせず、苦手なことを続けてきたことで「**回避行動**」をもって周囲に対して無意識に困難な状態をアピールをしてきたのではないか。
- ▶Aさんは退学後、スムーズに正社員として採用され自分らしく働いている。とはいえ**凸凹特性**がある以上、今後苦手なことは困難さとして顕在化し、苦悩することも予測される。その意味でも、就労支援事業所へつなげたことは有意味であったといえる。

まとめ

- 修学が困難な学生を1年生のうちに把握し、教育的支援とともに学外事業所でのキャリア支援プログラムや相談窓口等の利用へつなげることの大切さを確認できた
- アルバイトの経験は、進路変更の際に活かすことができる可能性を確認した
- 入学時の調査にて、本人の得意と苦手項目を把握して在学時にフォローを行うことは重要であることを確認した
- 就職した後に、困難さが自覚されたら事業所や窓口へ相談することのきっかけを在学中に伝えておくことの大切さを認識した

参考文献

- 1) 稲葉政徳：3年制リハビリテーション専門職養成校における発達障害やその類似特性がある学生に対する支援の課題と考察-臨床実習成就を主眼に置いて-，岐阜保健短期大学紀要，8，p.63-72，2018
- 2) 障害のある学生の受講を想定した遠隔授業の対応について（ver.1），筑波大学ダイバシティアクセシビリティセンター，<https://dac.tsukuba.ac.jp/shien/20200409-1/>，（閲覧日：2021年8月3日）

ご清聴ありがとうございました

